

## ○ 先生の物語

西 山 智 則

(1992 年度 B, 1995 年度 M, 1998 年度 D)

映画研究も仕事だと考えているために、毎日数本は映画を観ることにしている。最近はケーブル・テレビでメジャーな作品もマイナーな作品も、簡単に観ることができ、ありがたいことである。先日、『阪急電車——片道 15 分の奇跡』(2011 年)が放送されていて、久しぶりに鑑賞し直してみた。阪急電車の西宮北口から宝塚までの人間模様を描くオムニバス映画だが、その一話にひっこみ思案の女の子と軍事オタクの青年の関学生同士の恋愛が綴られており、関学の時計台がしばしば映しだされる。関西から遠のいてしまった身としては、じつに懐かしかった。映像のなかの時計台はやはり美しかったのである。不覚にも涙を流しそうになった。少しきどっていえば、あそこには僕の青春があった、というような感覚だろうか。とはいえ、それは、きらびやかな青春ではなく、映画館という闇のなかで孤独に鬱々と、何かを考えた青春であった。

こう書いていると、高校の国語教科書で読んだ伊藤整の「青春について」というエッセイを思い出した。「私は、健康な肉体の力、美貌、広い心、勇氣、才能、女性の友などという、青春の最も輝かしい伴侶と見なされるものを、全く欠いていた。それらのものを所有しない、という意識は、日常痛烈に私を苦しめ、自分を劣れるものと感じさせ」とコンプレックスを匂わせ、「しかし、だからといって、私が青春を知らなかったことにはならない。むしろ私は、それを所有しなかっただけ、それだけ、痛烈に青春を知っていたような気がする」と伊藤は書いていた。

僕が関学に入学したのは 1989 年、昭和天皇が亡くなり、平成元年を迎えた時だった。バブル経済やベビー・ブーマー最後の時期にあたり、キャンパ

スはけっこうにぎやかであった。入学当時、学科ごとに配属される人文演習では四〇名中、男性は三名しかおらず、どうにもなじめなかった。担任は英語学の影山太郎先生で、まだ何もよくわからない学生たちが、あの先生はじつはその道では權威なのよ、と噂していたことをよく覚えている。そんなキャンパス・ライフで、僕は英文学を読むわけではなく、ロバート・デ・ニーロ主演の『タクシー・ドライバー』に心酔し、映画ばかりをたれ流すように見ていた。「英検」ならぬ「映検」という映画検定までも登場し、実益ばかりが重要視される昨今、何の役にもたたぬと思っていた映画が、現在では研究の一環として役に立っているのだから、生きることはなかなか面白い。

1999年の博士課程後期修了まで、関学でちょうど十年の間、学生のままだった。英語を道具として海外の他者とコミュニケーションをしてゆこうとする膨張の欲望があったためか、多くの大学でまだまだ英文科がもてはやされていた。そして、バブルがはじけ、次第に日本が閉塞してくると、海外という外部に他者を発見していこうとする意識が、自分の内部に他者を発見しようするまなざしにとって代わられたように思われる。いわゆる「ころろ」がクローズアップされ、心理学が台頭してきた流れとなっていた。

とにかく、十年も英文科の学生をしていたのだから、それなりに思い出はある。しかしながら、その多くは先生にかかわるものである。笹山隆先生や杉山洋子先生は、学生たちをかわいがってくださり、ご自宅にもよく招いていただいた。シェイクスピア研究の權威であり、その剃刀のような厳しさとで聞こえていた笹山先生は、旅好きのグルメであらせられた。フランスで食べたフォアグラを、この世にこれほどの悦楽があらうか、と語られる冗談に僕はすぐにひき込まれ、食べたことのなかった珍味のことを夢想したものだった。戦後すぐにハーヴァードに留学された笹山先生のF・O・マシーセンやハリー・レヴィンについてお話ももちろん興味ぶかかったのだが。

しかしながら、ここでは何をおいてもゼミの先生である大井浩二先生のことを語っていききたい。なぜか自分とは対極なジョン・ウェインという象徴的映画スターを僕が大好きだったこともあり、文化研究にもお強く、スピルバ

---

ーグ監督作品『ジョーズ』を現代の西部劇として扱う大井先生のゼミを選考させていただいた。1991年のことである。いわゆる正典（キャンノン）としての文学ではなく、『秘密の花園』『ハイジ』『トム・ソーヤーの冒険』のような大衆文化を論じる先生のゼミは刺激に満ちていた。文学テキストの内部を精密に論じる「ニュー・クリティシズム」のころから、テキストの外部の必要性を説き、『アメリカ自然主義文学論』（研究社、1973年）、『ナサニエル・ホーソン論——アメリカ神話と想像力』（南雲堂、1974年）にまとめられ、七〇年代の早い時期から文学の文化研究を主張されていた大井先生は、その当時の文学研究において亜流であったのかもしれない。しかしながら、私が博士課程前期に入学した1994年は、日本でも「ニュー・ヒストリシズム」「カルチュラル・スタディーズ」などの研究方法が最先端を迎えていた。先生からすれば、ようやく時代が追いついてきたというだけのことだったのだろうと、今さらながら実感している。

とにかく、「マゾヒスティック」とも思えるような勤勉さで、先生はどんな作家もずばずばこなしておられた。馬場美奈子先生の授業では、ソール・ペローの『フンボルトの贈り物』を精読したが、この本も1977年に先生がすでに翻訳をだしていたことにも驚いたものである。皆は料理の仕方にこだわるが、僕は最初から深海魚をつかまえて、珍味で勝負する。そう先生はおっしゃっていた。大学院ではまだ珍しかったスザンナ・ローソンの『シャーロット・テンプル』のようなマイナーな女流作家をたくさん読む機会をくださった。専門といえば、普通、「ポー、ホーソン、メルヴィル」のように「作家」で括るものだが、「伝記、手紙、日記」というような枠組みで、どんな素材でも美味しく料理されてしまう先生の場合は、作家とかジャンルとか時代とか、そんな枠組みはとっくに超越されている。卒論で扱ったポーについて僕が今でもせこせこ原稿を書いていると、先生は今頃どんな珍しい魚をつかまえているのだろうか、ふと、そんな思いが脳裏をかすめる。

花岡秀先生が経済学部から文学部へとお移りになり、飲み会がぐっと増えた。先生がたの本音をうかがうことも多くなってからは、大井先生は持ち前

のユーモアとブラック・ジョークでいつも皆を笑わせていた。また、酒をこよなく愛されて、酒と文学の研究すらなされた花岡先生は、豪快かつ繊細なかたで、僕たち院生が飲んでいる居酒屋に、たまたまほかの先生がたとおいでになり、僕たちが帰ろうとすると、すでに勘定を払っていただいていたことがわかったという有り難いことをよく憶えている。巽孝之先生や武藤脩二先生をお呼びした集中講義でも、講義が終われば懇親会が催され、あこがれの先生方と語れてじつに楽しかった。

僕は埼玉の大学で勤務することになったが、2010年に法政大学での日本ポー学会第三回年次大会において、先生の講演の司会を務める機会にめぐまれた。当日新幹線でいらした先生は、「ポーの収入——アメリカ作家の家計簿をのぞき読む」という講演をされて、懇親会にもお顔をだしてくださり、なんとその日の新幹線で神戸に帰られた。こんな日が来ようとはと、何とも言えない幸福感に包まれると同時に、僕が大学生だった頃と少しもお変わりのない先生のはつらつとした「若さ」に研究者の真髓を見て、自分が恥ずかしくもなった。

今でも関学に来ると、時計台の美しさに息をのむ。そして、時計台のすぐそばの文学部英文研究室の思い出が頭をよぎる。じつにたくさんの思い出、わずかだが英文学の知識を、僕は「所有」していたことに気がつく。思い出というと、どこか終了しているような感じだが、生涯現役をつらぬくとおっしゃる大井先生は、つぎつぎに研究を新たにしている。先生の最新刊『エロティック・アメリカ——ヴィクトリアニズムの神話と現実』（英宝社、2013年）をのぞき読んでみても、文学研究の粋など、はるかに超えた知識の幅に思わず息をのむ。そういえば、伊藤整のエッセイは、「青春の明け方は、ずいぶん早めにやってくるもので、そして、それはなかなか終わりにならない」で始まっていた。